

科研：基盤研究（B）（一般）「東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆」
 （課題番号15H03221）（平成27年度～平成29年度）第9回例会

日本と中国の遠隔交流が創出する 質的価値の探究

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
 杉江聡子
 ssugie@imc.hokudai.ac.jp

2018年3月10日（土）豊平館



目次

1. 研究背景・目的
2. 研究方法・実践
3. 分析①遠隔交流プロセスと成果の記述
4. 分析③学習者視点の学習経験・成果・価値
5. 考察・結論・今後の課題

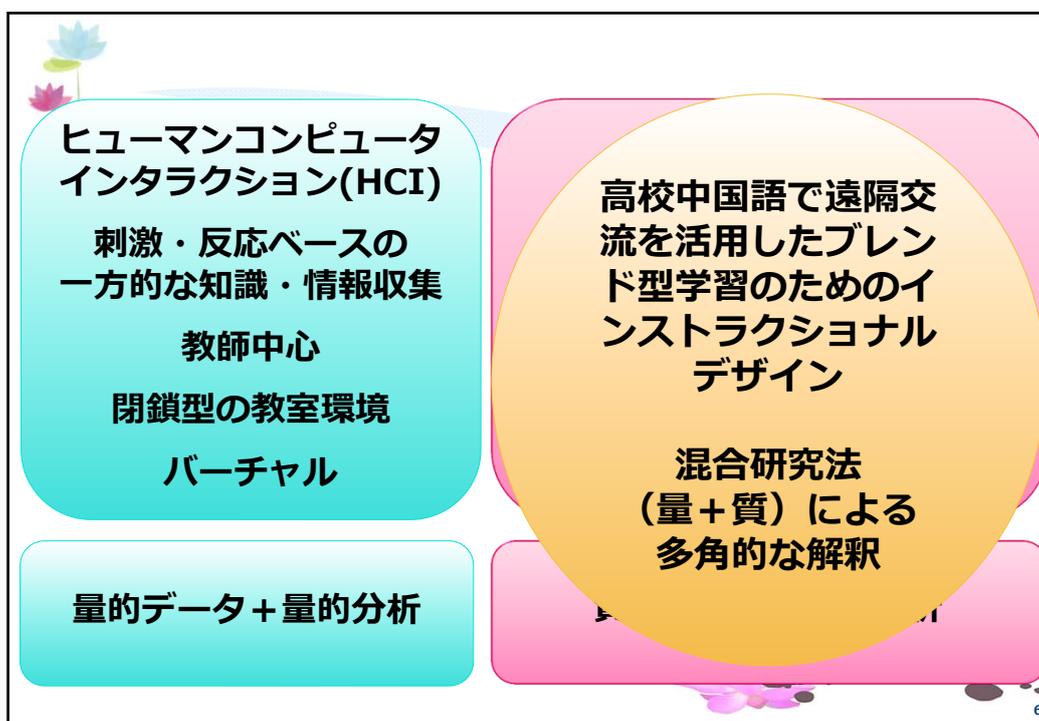
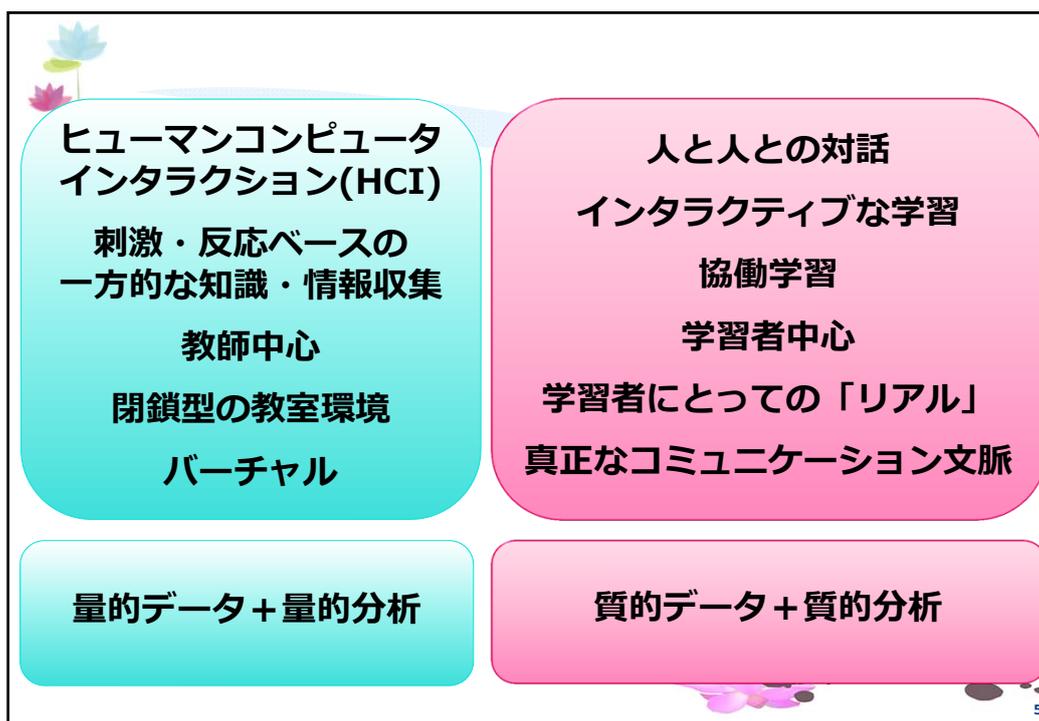


1. 研究背景・目的



研究背景

1. 中華文化圏からの訪日観光客の急増
2. 21世紀の教育情報化と学びの質保証
3. 社会的・教育的ニーズと現場の乖離





先行研究

1. 「英語教育におけるメディア利用」
(見上, 西堀, 中野, 2011)
2. 立命館大の英語異文化交流 (坂本, 2013)
3. 早稲田大学の多言語遠隔交流
(砂岡ほか, 1999-2004)
4. 沖縄の高校中国語における実践
(城間, 2013)
5. 遠隔交流を中国語ブレンディッド・ラーニングの実践と混合研究法による評価
(杉江, ミツ木, 2015)

7



先行研究

- 1
- 知識定着や技能訓練に限らず「社会に開かれた、生きた」学習活動
 - 異文化間コミュニケーションと即時のインタラクションを実体験
 - 失敗体験と反省から改善努力を繰り返しソーシャル・スキルを習得

8



先行研究で残された課題

1. 高校・大学の学習環境・リソース差
2. 高校のフィールドに適したID・持続的な遠隔交流の実践方略が不明
3. 学習成果や有効性を検証する指標・質的評価の方法論の不足

9



研究目的

1. 中国語母語話者との遠隔交流を組み込んだブレンド型学習が学習者の情意面（関心・態度・認識）や学習意欲に与える影響を知る
2. 学習の過程で創られる学習の経験、成果とその価値を明らかにする

10



研究の意義と期待される成果

1. 革新的な実践
2. 遠隔交流の経験・成果・価値の多角的解釈
3. 高校中国語に適したブレンド型学習モデルの開発・運用・実践

11

2. 研究方法・実践



12

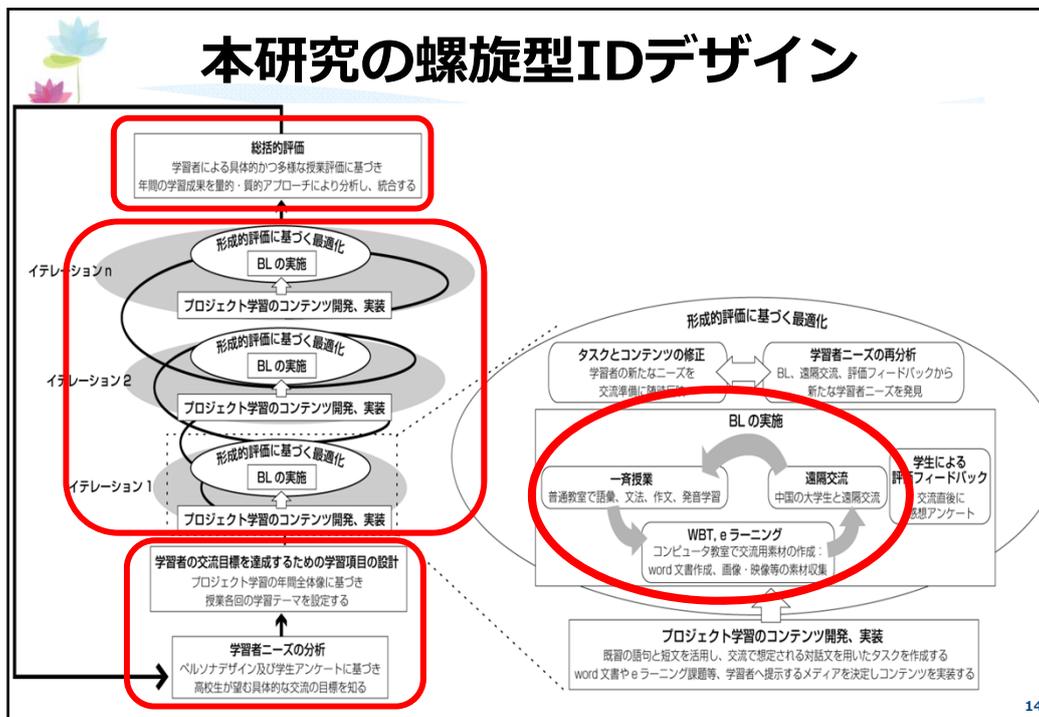
研究概要

1. 高校中国語（第二外国語）
2. ID理論・ブレンド型学習モデル
3. 混合研究法
4. 社会構成主義

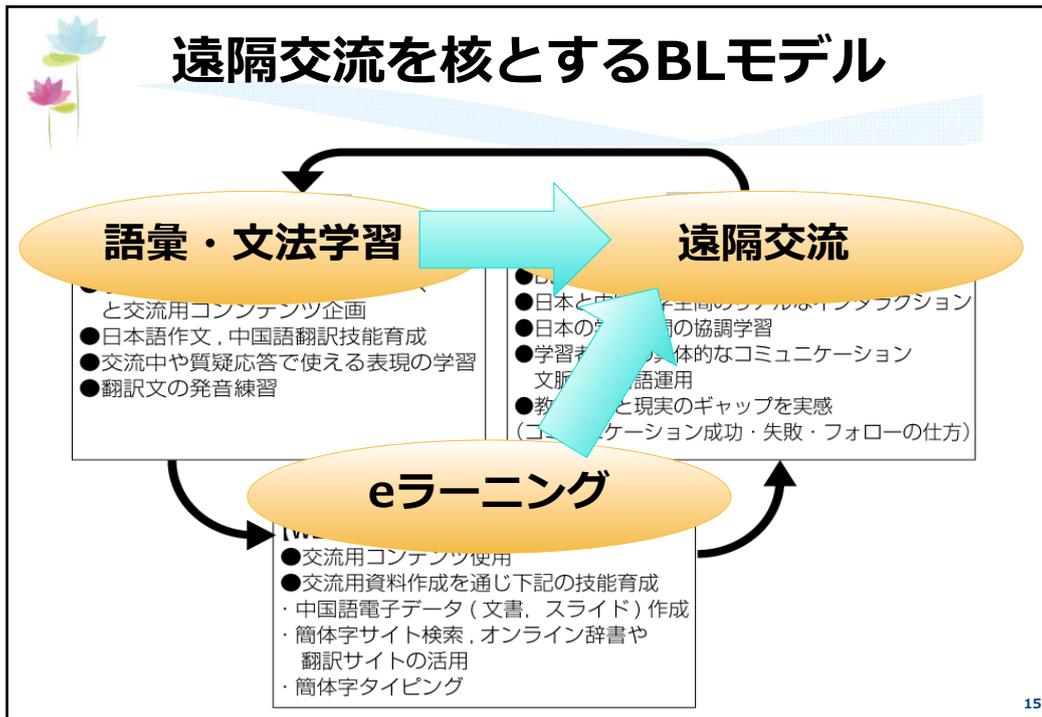
「学習者にとってどのような学習の経験が蓄積され、成果が認識され、価値が創出されたか」を学習者視点のデータから解釈・探究

13

本研究の螺旋型IDデザイン



14



3. 分析①

遠隔交流のプロセスと成果の記述



17

質的データ分析

1. 遠隔交流のプロセス：
全9回のインタラクションを記録
(写真+テキスト+解説)
2. 学習の成果：
活用語句をコミュニケーション能力指
標（外国語学習のめやす2012, 當作・中野）
に基づき分類・一覧表作成

18



遠隔交流トピック

1. 第1・2回「あいさつ、自己紹介」
2. 第3・4回「日本の高校生活：グルメ、学校行事、芸能、流行、インターネット」
3. 第5回「学校祭」
4. 第6・7回「夏休みの思い出」
5. 第8・9回「中国からの質問：日本のニュース、北海道の特色、高校生活、娯楽、卒業後の進路」

19



KBY：我叫KBY

(私は～です)

【画面を見て笑顔で発話】

【聞こえたか教師が中国語と日本語で確認・説明】

YG：我叫YG

【画面を見て笑顔で発話】

SG：啊,你好!

(はい、こんにちは!)

YG：やったあ、ふふふ

【SGの反応から笑顔でつぶやき通じた喜びを表す】

20

活用語句の一覧表			
話題分野	言語運用能力レベル	中国語	日本語
自分と身近な人々	1-a. 名前や属性を言ったり尋ねたりできる	我叫+姓名。	私は（フルネーム）と申します。
		我的生日是~月~号。	私の誕生日は~月~日です。
		我是运动员。	私はスポーツ選手です。
	1-b. 家族構成について、会話したり、書いて説明したりできる	我家有~口人。	私の家は~人家族です。
		爸爸, 妈妈, 奶奶	お父さん、お母さん、おばあちゃん
	1-c. 簡単な自己紹介を口頭でまたは書いてすることが出来る	我是国际情报高中三年级的学生。	私は国際情報高校3年生の学生です。
		我一直在北海道。	私はずっと北海道にいます。
	3-c. 自分の経験について、語り合ったり書いて伝えたりできる	三年前我参加澳门的国际比赛了。	3年前にマカオの国際大会に出場しました。
		冠军	優勝、チャンピオン、第1位

21

4. 分析③

学習者視点の学習の経験, 成果, 価値



22

質的データ分析

1. SCAT (Steps for Coding and Theorization) (大谷, 2008, 2011) で遠隔交流の感想を解釈
 - * 学習者の個性や具体性を維持した概念整理・認識の理論化
2. 学習者の経験・成果の対応と時系列の変遷
 - * 価値と成長プロセスの表現
3. HKCoder (樋口, 2014) による概念図
 - * 全員のストーリーラインに基づく共通概念の可視化

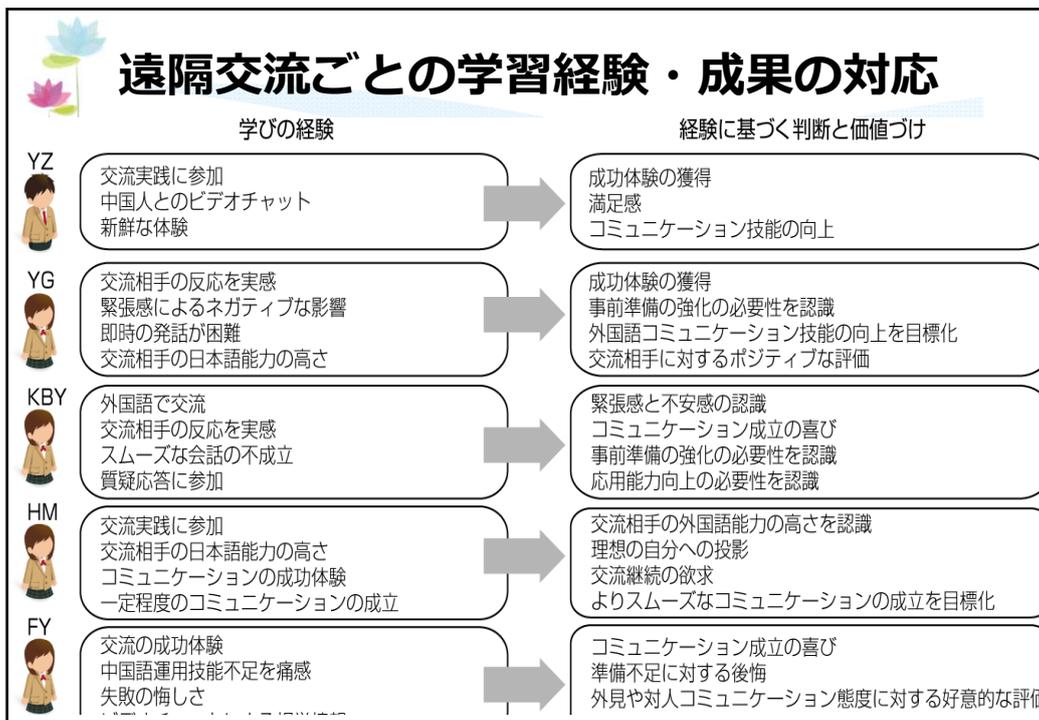
23

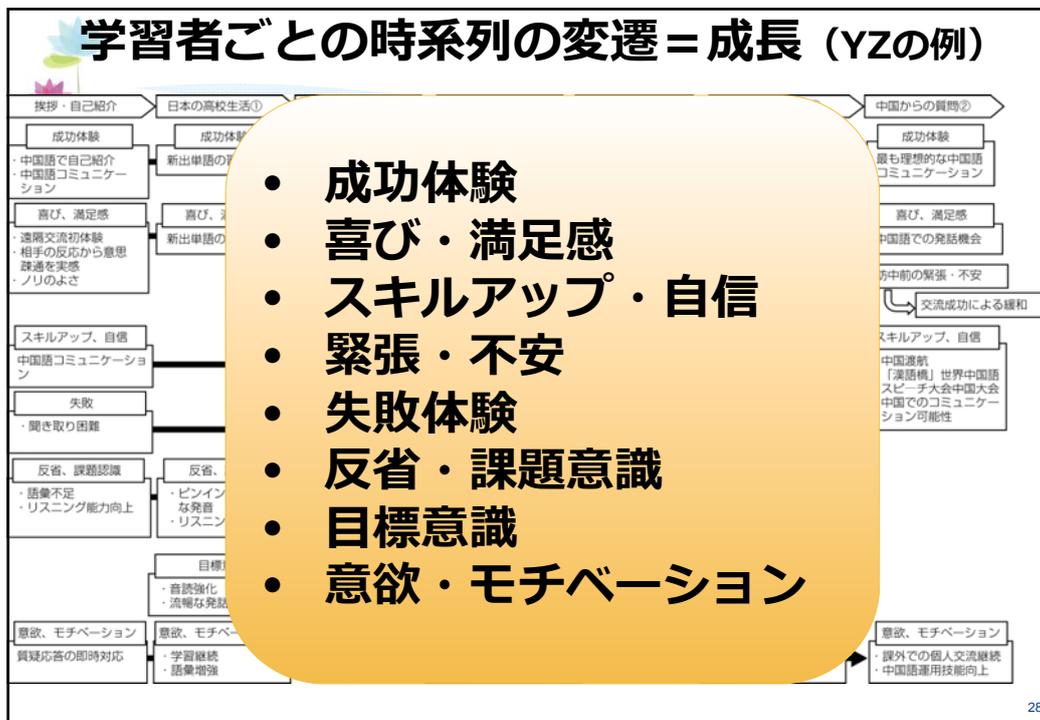
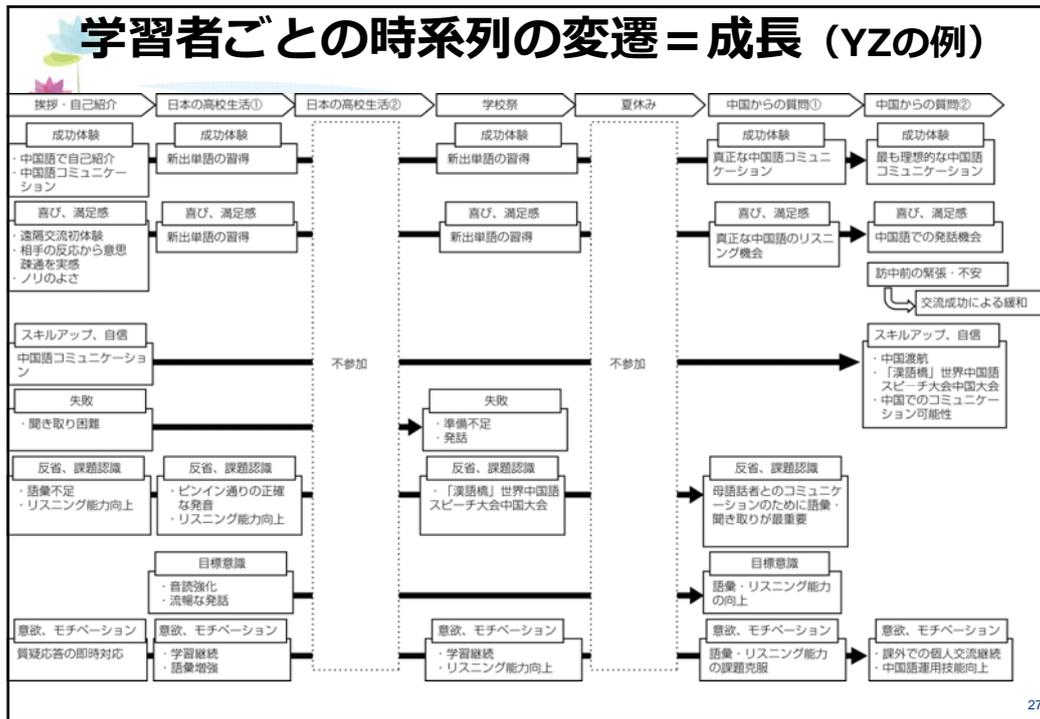
SCATの分析プロセス

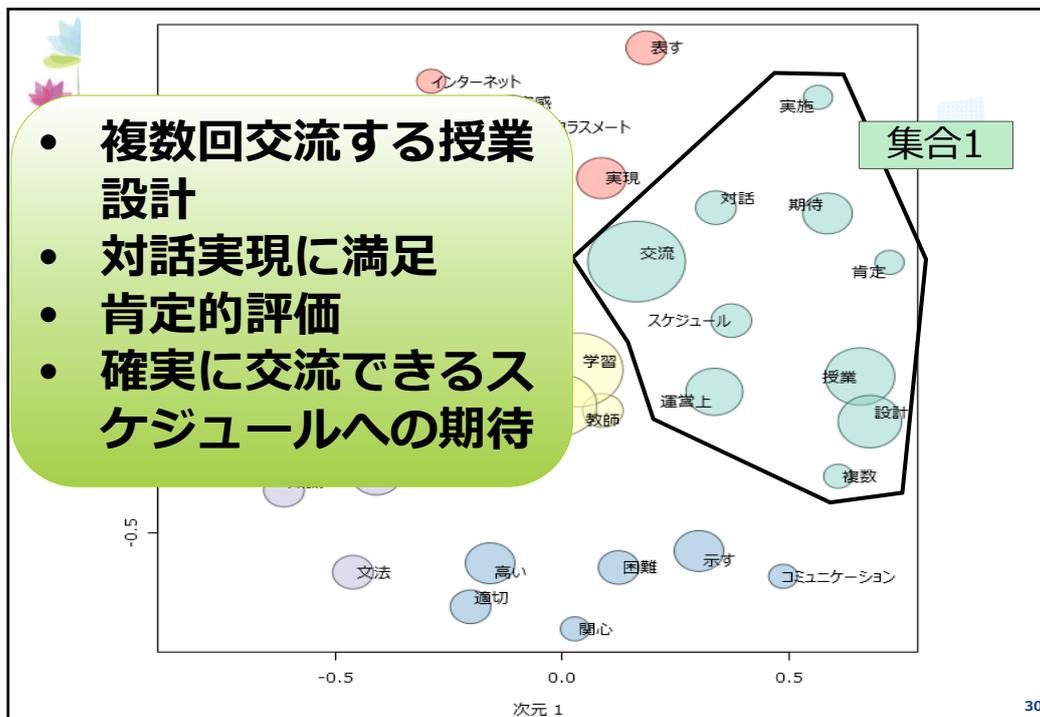
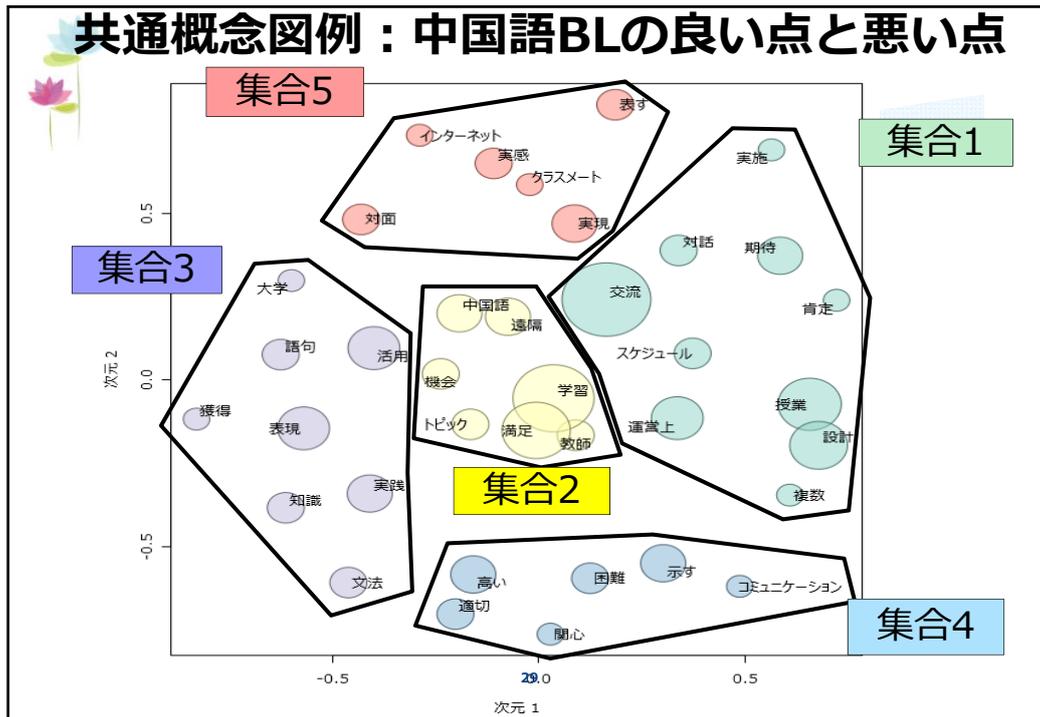
番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念	<5>疑問・課題
Y	【良かった点、以下同】 なかなかこのような機会がないのでとても良い体験になりました。自己紹介もわりとうまくいき相手にもので、とす。向こともノリで自分リラックスしました。	機会がない, 自己紹介もわりと良かった, 相手にも	貴重な機会, 自己紹介もわりと良かった		交流実践の経験に満足, 中国語コミュニケーション成功体験, 相手のコミュニケーション態度を好意的に交流タイムックスした心情	自己紹介がうまく相手に伝わったと感じたのは相手のどのような反応によるものか? 相手のどのような言動でノリが良いと判断したのか? 他の学生はリラックスしていたか?
Z	【今後のですが、ポキヤブので、これは課題だと思えます。また、リスニングの方でも聞き取ることが難しい単語もあったので、早く耳を慣らして質疑応答を素早くできるようにしたいです。	リスニングで聞き取ることが難しい単語もあった, 耳を慣らす, 質疑応答を素早くできるように	語彙不足, 聞き取り能力不足, 聞き取り能力の向上, スムーズな質疑応答	中国語のコミュニケーション技能不足 (原因)	語彙不足とリスニング能力の向上を課題として認識, 質疑応答の即時対応を目標化	聞き取れなかった単語は何か? 質疑応答はどのように行われたのか?
	【その他、以下同】今回、中国人と初めてskypeをやりました。	中国人と初めてskypeをした	skype初体験	体験の新規性 (原因)	ビデオチャット, 新鮮な体験	二回目以降も楽しいか? 24

コード化と概念解釈

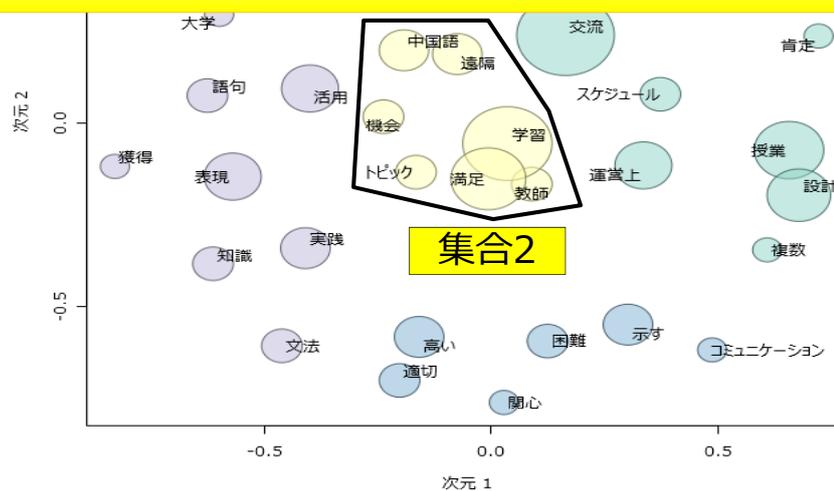
<p>ストーリーライン (現時点で言えること)</p>	<p>学生YZは、あいさつ・自己紹介の遠隔交流活動に対して、中国人学生とのビデオチャットによる交流実践を行う機会を通じて、中国語を用いたコミュニケーションの成功体験を獲得したことに満足した。また、相手のコミュニケーション態度を好意的に評価し、交流時のリラックスした心情を維持した(良かった点)。また、この体験を通じて、自分自身の中で課題</p>
<p>コード化と概念解釈に基づく再文脈化・理論化</p>	
<p>理論記述</p>	<p>学生YZにとって、自己紹介をテーマとした遠隔交流活動は、中国語コミュニケーションの成功体験と自身の技能不足に対する気づきをもたらす貴重な機会と体験として意味づけられた。</p>
<p>さらに追究すべき点・課題</p>	<p>自己紹介がうまく相手に伝わったと感じたのは相手のどのような反応によるものか？相手のどのような言動でノリが良いと判断したのか？他の学生はリラックスしていたか？</p>



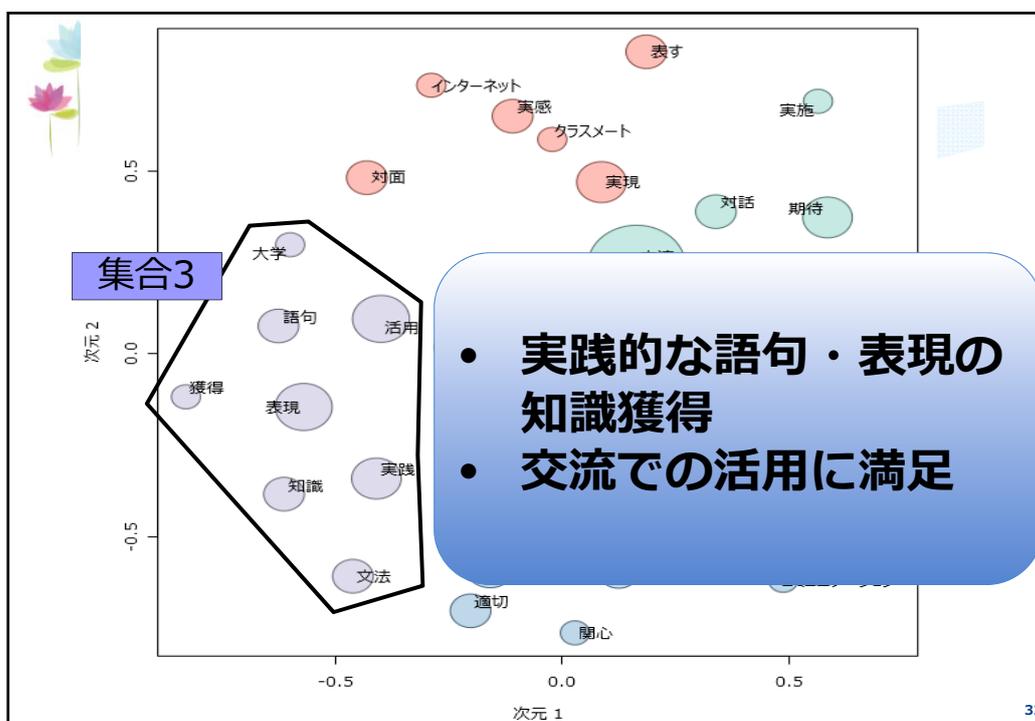




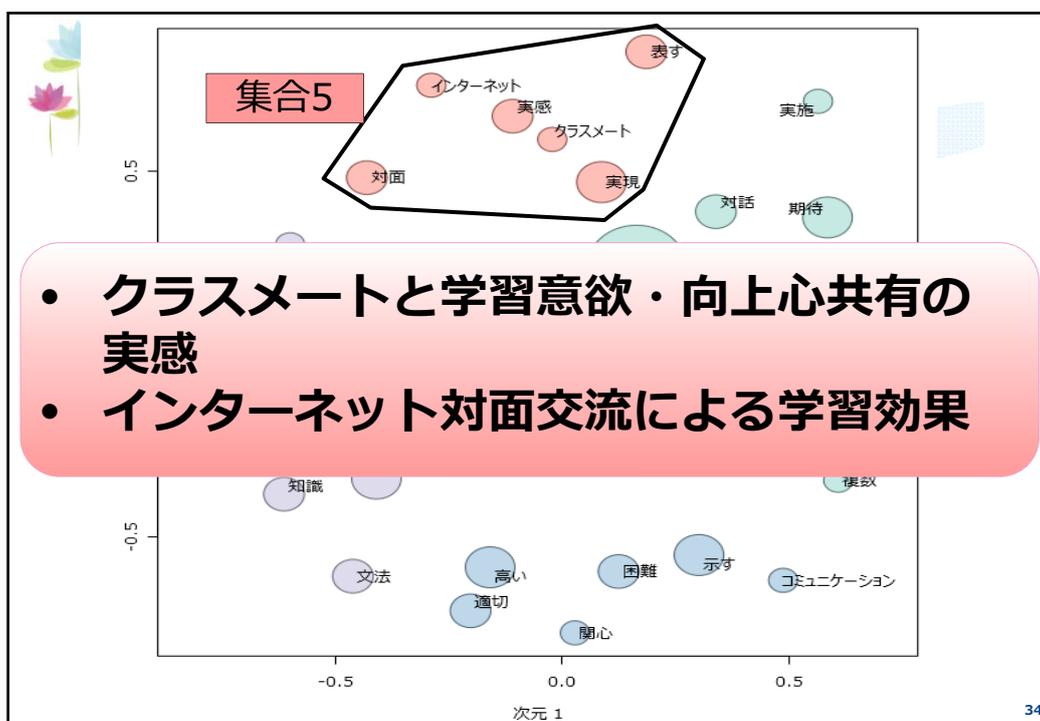
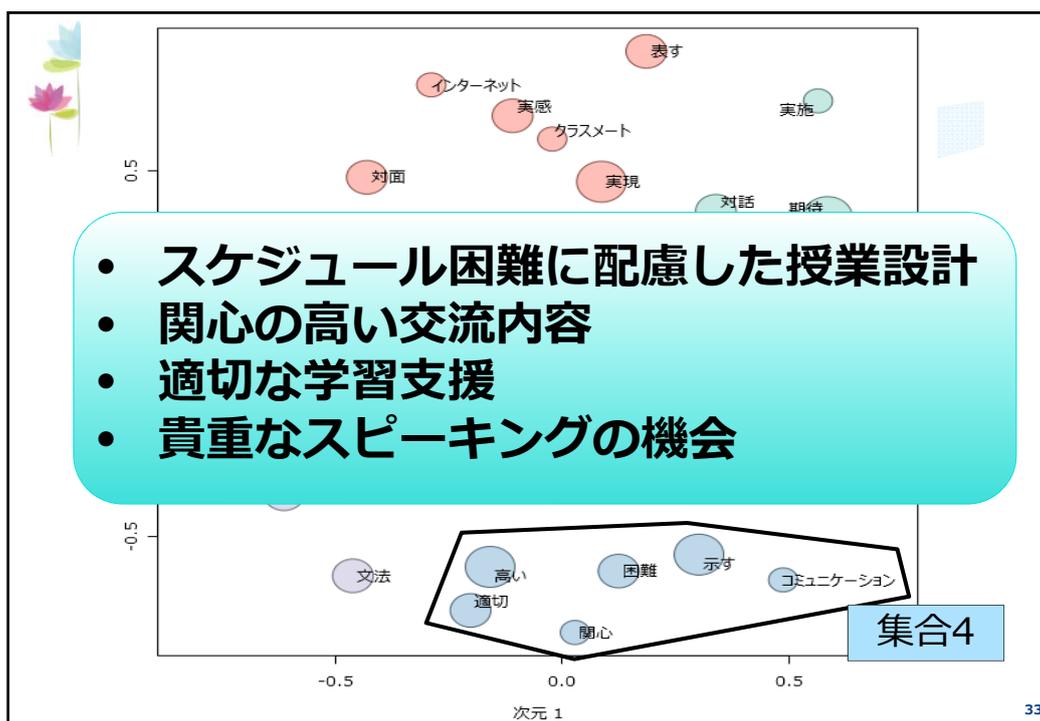
- 教師支援 ・ 親和性の高い交流トピック
- 学習意欲の向上
- 遠隔交流と留学生対面交流実現に満足

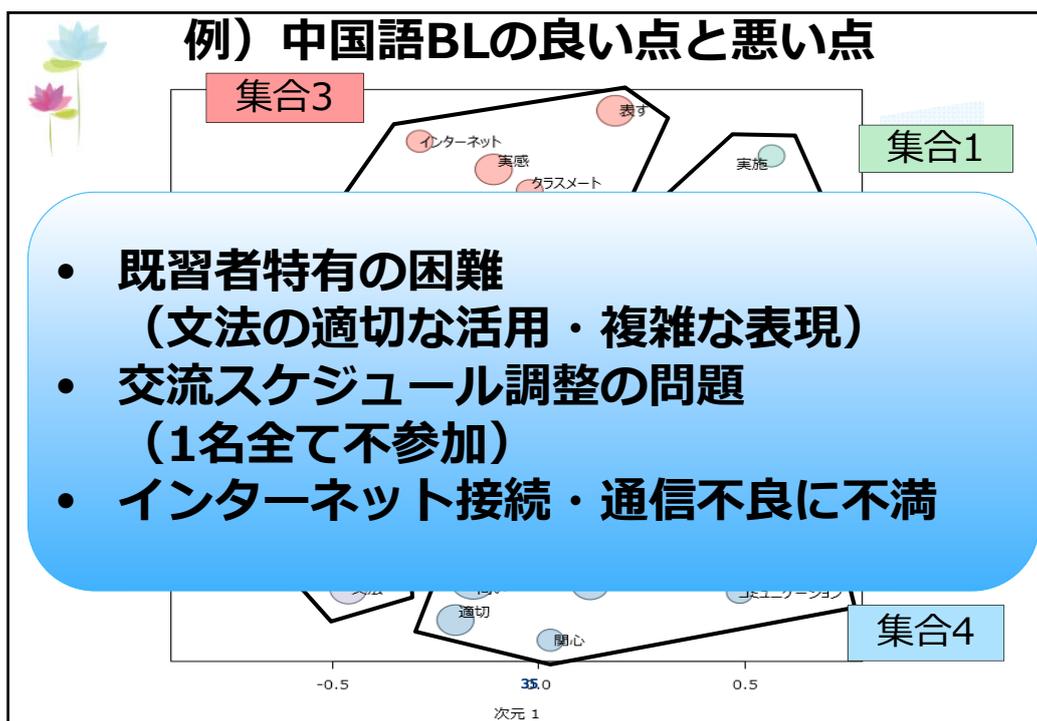


31



32





5. 考察・結論・今後の課題





本研究の目的

1. 中国語母語話者との遠隔交流を組み込んだブレンド型学習が学習者の情意面（関心・態度・認識）や学習意欲に与える影響を知る
2. 学習の過程で創られる学習の経験、成果とその価値を明らかにする

37



BLの価値の発見

1. 学習者から見た質的評価
2. 遠隔交流のインタラクション経験に基づく評価
3. 教育的観点からの評価
4. IDとしての評価

38



1) 学習者から見た質的評価

1. 発見・気付き
2. 成功体験・喜び・満足感
3. 教師とのラポール・支援環境による緊張・不安の軽減・緩和
4. 失敗経験に基づく反省・課題認識・目標設定
5. 「生の中国人」に接するミクロな経験からメディア・リテラシー能力習得
6. 初習者と既習者の相違

39



2) 遠隔交流のインタラクション経験に基づく評価

1. 生きたことばの習得・学習の強化
2. 視覚情報によるコミュニケーション成立
3. フォロー・励ましによる自信の強化・協調学習の成立
4. 共同体験によるインタラクティブな学習の成立・仲間意識の形成
5. 失敗に対する抵抗感の軽減

40



3) 教育的観点からの評価

1. 遠隔交流準備の学習活動と交流本番で学習者が感じる困難が明らかに
2. 学習支援を提供すべき3つのタイミング
(遠隔交流前/中/後)
3. 各タイミングにおける学習支援方略・教師の役割

41



4) IDとしての評価

有効な学習環境のデザイン

1. 学習者ニーズに基づく螺旋型IDの理念
2. 学習者が価値を認める交流を核としたBL

残された課題

1. 学習者の自律性・主体性と教師のコントロール・緊張感のバランス
2. 交流の円滑な進行と支援介入のバランス

42



本研究の成果

1. 学習意欲のIDの理論的枠組み・方法論に基づく革新的なBL実践
2. 遠隔交流のプロセス, 経験, 成果を学習者視点のデータと混合研究法のアプローチで多角的に解釈
3. 高校中国語に適したID・BLの開発・実践・評価

43



本研究の学術的意義

1. 学習者ニーズに基づくID・遠隔交流を活用した高校中国語のためのBLモデルの設計・開発
2. 再現性・恣意性の問題に配慮した研究プロセスと分析アプローチ
3. 遠隔交流を活用したBLが創る価値・有効性・課題の解明

44



今後の展望と残された課題

1. ID・BLの実践上の課題の解決方略を検討
2. BLが学習意欲に与える影響を検証する指標の改善（例：ARCS+AT）
3. 高校中国語のコミュニケーション能力指標と実情の乖離を考慮し指標の構成・内容の再検討

45



参考文献

Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory*. New York: Sage Publications. (シャーマズ, K. 抱井尚子, 末田清子 (訳) (2008). 『グラウンデッド・セオリーの構築 社会構成主義からの挑戦』 京都：ナカニシヤ出版.)

Denzin, N. (1989). *The Research Act: A Theoretical Introduction to Sociological Research Methods* (3rd ed.), Upper Saddle River, NJ: Pearson Prentice Hall.

Flick, U. (2007). *Qualitative sozialforschung*. Humburg: Rowohlt Taschenbuch Verla. (フリック, U. 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 (訳) (2011). 『質的研究入門—“人間の科学”のための方法論』 東京：春秋社.)

Gagné, R. M., Wager, W. W., Golas, K. C., & Keller, J. M. (2005). *Principles of instructional design* (5th ed.). CA: Wadsworth. (ガニエ, R. M., ウエイジャー, W. W., ゴラス, K. C., & ケラー, J. M. 鈴木克明, 岩崎信 (訳) (2010). 『インストラクショナルデザインの原理』 京都：北大路書房.)

樋口耕一 (2014). 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』 京都：ナカニシヤ出版.

稲垣忠 (2003). 「学校間交流学習における協同性の研究」2003年関西大学総合情報学研究科博士論文. Retrieved April 25, 2015, from <http://www.ina-lab.net/special/copo/index.php/2011-03-02-16-44-08/47-dron>

Instructional Design Models. (n.d.). Retrieved April 25, 2015, from http://www.instructionaldesigncentral.com/htm/IDC_instructionaldesignmodels.htm#kemp

Keller, J. M. (2010a). *Motivational design for learning and performance: The ARCS model approach*. New York: Springer. (ケラー, J. M. 鈴木克明 (訳) (2010). 『学習意欲をデザインする—ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』 京都：北大路書房.)

見上晃, 西堀ゆり, 中野美智子 (2011). 『英語教育におけるメディア利用 CALLからNBLTまで』 大学英語教育学会 (監修) 『英語教育学大全』 12, 東京：大修館書店.

46

- Morrison, G. R., Ross, S. M., Kemp, J. E. & Kalman, H. (2012). *Designing Effective Instruction* (7th ed.). Hoboken, NJ: Wiley.
- 大谷尚 (2008) 「質的研究とは何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして」『教育システム情報学会誌』24(3), 340-354.
- 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』10(3),155-160.
- 坂本利子 (2013) 「異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか—多文化共生力育成をめざして—」『立命館言語文化研究』24 (3) , 143-157.
- 城間真理子 (2013) .「コミュニケーション力と協働力の育成をめざして—高校中国語教育での実践報告」『中国語教育』11, 33-45.
- 杉江聡子, 三ツ木真実 (2015) 「遠隔交流を活用した中国語ブレンディッド・ラーニングの実践と混合研究法による評価」『教育システム情報学会誌』32 (2) , 160-170.
- 砂岡和子(2011)「チャット投稿の質量と語学習得効果—テキストチャットを利用した中国語教室授業—Topic's quality and its learning effects--Chinese classroom by chatting—」『2010年度 ICT 授業実践報告書』, 139-146.
- 鈴木克明 (2010) .「ARCSモデルからARCS-Vモデルへの拡張」『第17回日本教育メディア学会年次大会発表論文集』, 115-116.
- 田邊鉄, 清原文代 (2009) 「「学び合い」を促すe-Learning教材」『CIEC会機関紙 コンピュータ&エデュケーション』27, 24-27.
- 當作靖彦, 中野佳代子 (監修) (2012) .『外国語学習のめやす2012 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』東京: 公益財団法人国際文化フォーラム.
- 趙秀敏, 富田昇, 今野文子, 朱嘉琪, 稲垣忠, 大河雄一, 三石大 (2014) 「第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングにおけるeラーニング教材設計指針の作成と実践」『教育システム情報学会誌』31 (1) , 132-146.

47

- 文部科学省 (2010) .「教育の情報化に関する手引」. Retrieved June 1, 2015, from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm
- 文部科学省 (2011a) .「ICT活用教育の推進に関する調査研究 (平成21・22年度) 委託業務成果報告書 (平成23年)」. Retrieved December 1, 2014, from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1307266_1.pdf
- 文部科学省 (2011b) .「教育の情報化ビジョン (平成23年公表)」. Retrieved April 25, 2015, from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/1305484.htm
- 文部科学省 (2012) .「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申) :用語集」. Retrieved December 1, 2015, from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 文部科学省 (2013) .「第2期教育振興基本計画 (平成25年6月閣議決定)」. Retrieved July 9, 2015, from http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/___icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf
- 文部科学省 (2014) .「ICTを活用した教育の推進に関する懇談会 (中間まとめ) 報告書 (平成26年度)」. Retrieved May 1, 2015, from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/___icsFiles/afieldfile/2014/09/01/1351684_01_1.pdf
- 文部科学省 (2015) .「平成26年度文部科学白書」. Retrieved January 13, 2016, from http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201501/1361011.htm

48